

未来の社会の姿を徹底研究

東京工科大学
IRセンター長・コンピュータサイエンス学部教授
七丈直弘さん

東京からこんには

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さの可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

変化の可能性・幅を知る

先端的な経歴が目を引く。現在の研究の中心テーマは「未来洞察」。6年前、文部科学省の科学技術学術政策研究所に勤務した時に、「日本の科学技術の30年後を予測する調査を担当したのがきっかけです」。国際的な人脈も広く、各国の専門家も一目置く。

「未来洞察」は、社会変化の可能性や範囲を知るための手法で、多くの国や国際機関、多国籍企業などが活用している。予測や確率での評価が可能な天気予報などと違って、「未来は今のわれわれが知り得

ないような様々な、そして複雑な変化が起きるので、確率的な評価は難しいですが、だいたいこういった範囲で物事が起きるのではないかと、ということを考えることはある程度可能なんです」。

OECD(経済協力開発機構)加盟国の研究者やシンクタンク関係者らとワークショップ(グループディスカッション形式)などの活動を通じて、「未来の変化の可能性や変化の幅を研究しています。何度も議論を繰り返していくと、一人では思い浮かばなかった未来の姿が見えてくるのです」。

30年後の世界については、「モザ

イク化する社会になっていると思います。意見が違う人たち同士が同居する世界ですかね」と予測する。コンサルを引き受けた大手企業と一緒に「製造業の未来を考えた一つとして注目を集めているのだ」。

大学との連携推進を

常に世界に目を向けている七丈さん。「静岡市について、こうしたらいいとか言うのはなかなか難しいですね」と断りながらも、「高齢化や過疎化による減退などの社会課題に対応し、同時にグローバル化の流れにしっかりとついてほしい」と話す。

「気持ち若いが若い60歳、70歳代の『若者』を含め、社会課題を担う若者たちの活動、活躍が、外から見える形になったら素晴らしいと思います」。

大学との連携も指摘する。「静岡大学や県立大学などが持っている技術をもとに、事業化したり、新しいビジネスモデルとなるようなスタートアップ企業が生まれる環境づくりを進めてほしいですね」。

大学との連携には田辺信宏市長も前向きとされ、大いに期待したい。(文：長田義明、写真提供：七丈さん)



Naohiro Shichijo

静岡市葵区生まれ。県立清水東高校理数科卒業。1994年、東京大学理学部数学科卒業。東大大学院工学系研究科博士課程修了、同大学院准教授、文部科学省科学技術・学術政策研究所上席研究官を経て、2016年、現職に就任。48歳。内閣府総合科学技術イノベーション会議上席政策調査員、文部科学省科学技術・学術政策研究所客員研究官。政府の第10回科学技術予測調査の設計・実施をした。東大大学院では、コンピューターグラフィックス、アニメーションコンテンツ系の人材育成などに当たった。国内外で講演、著書、論文多数。専門は未来洞察、技術経営、計算材料科学。